

明清の族塾に関する一考察

——陽川孫氏を中心に

郎 潔

始めに

族塾、「家塾」・「祠塾」・「荘塾」とも呼ぶ、宗族がその子弟に教育を施すために設けた教育機関である。『紅樓夢』第七回に賈宝玉が秦鐘に賈氏一族の族塾に入学を勧めた際、その族塾について以下のように紹介している：「わたしのところには家塾が設けてあって、一族のなかで先生を招ぶだけの余裕のない者は塾には行って勉強できるしくみになってますし、その若い連中のなかには外戚の者も含まれ、仲間入りして勉強できるんです。」¹⁾ 第八回にも、その族塾に関することが書かれている：「そもそもこの賈家の義塾といいますのは、ここから一里（華里）ほどの遠くもない場所であり、もとはといえば、その昔、先祖の手で建てられたもので、一族の子弟のなかに貧しくて先生を招ぶだけの資力に恵まれない者がいると、ここに入らせて学問を修めさせる仕組み。およそ一族中の官位をもつほどの者はこぞってその俸給の多寡に応じた銀子を出し合い、塾の運営費を補助しますし、特に年長の有徳の人を選んでこれを塾頭に据え、子弟の訓育に専念させる建て前になっています。」²⁾

小説の虚構による描写ではあるが、作者の生きた時代の族塾の風貌について幾つかのことが窺える：先ず、族塾の設立は、宗族のなかで、先生を雇えない子弟に教育を施すことが主な目的である。場合によって、宗族の子弟以外、宗族の権力者の許可を得た場合、親戚の子供の入学も認められる。族塾の経営は、宗族のなかの有力者（官を為す者）の寄付によって成り立っている。経済力を持っている宗族の強力なバックアップで族塾が設立・経営され、それによって子弟の教育環境が改善される。子弟が整った

教育環境で才能を伸ばし、もし成功を得た場合には、また族塾の経営に協力する。このように教育投資と人材育成が良い循環を作り出すことで、多くの人材を生み出すことが可能になったのであろう。一方、小説に書かれたように親戚の子弟の金栄、秦鐘などが、生活支援や啓蒙教育を受けるために、賈氏のような大宗族に依附しなければならないことからすると、族塾の開設は全ての宗族ではなく、族塾の経営を長期的にバックアップする経済力を持っている宗族に限られることが推測できる。

筆者は今、明と清の時代に栄えた多くの文化宗族を対象に、宗族と文学との関係を考察する論文を執筆している。それらの文化宗族の繁栄の背景を分析するには、支えの一つである族塾の存在を避けられない。族塾について、多賀秋五郎の『中国宗譜の研究』³⁾の第五章に「宗譜を通じてみた国家の教育方針に対応する族塾に関する考察」という一節があり、豊富な族譜に基づいて、族塾の教育対象・学習内容・教員招聘等について詳しく考察している。大木康の論文「明清時代の科挙と文学——八股文をめぐる」の第二部分に族塾の八股文教育についての詳細な分析がある。⁴⁾又、胡学亮が論文『清代中國に於ける族塾の普及とその要因』⁵⁾では、清代の族塾の普及状況とその理由を究明した。本稿はこうした先学の研究成果を踏まえて、族譜などの資料を手がかりに、陽川孫氏の族塾を中心として、そして、いくつかの族塾を考察し、文化宗族における族塾の役割とその仕組を明らかにしたい。

一 陽川孫氏の族塾の概況

陽川というところは山陰つまり現在の紹興にある。富春の名族の孫氏の一支が陽川に移り定住したのは、元末のことである。移住してより、数百年が経ったが、現れた人材が疎らである状況に憂心を抱いた十三世の孫毓敏という人物が一族の最初の族塾——春山家塾を開設した。その後、水竹居義学と養正齋義学も次々と開設された。以下、この三つの族塾の設立及びその運営状況を比較してみよう。

春山家塾は十三世の孫毓敏とその息子の孫連玉が創設したもので、村の東部にあり、右に宗祠と繋がる。北に向いている建物には部屋が5つある

が、そのうち、中の三部屋は「譚藝会文之所」で、残った二部屋は先生の泊まる所と客室である。その前後の建物は板壁で二十部屋に区切られ、生徒の住む場所とした。東側の建物には部屋が3つあり、それぞれ「庖厨」「庖人」「架閣器用之処」となっている。生徒の「適性怡情」の為、その庭園に、亭、台、樓閣、泉、岩、沼、池なども配置した。春山家塾の利用者は宗族の子弟だけでなく、「遠近求学者」の入塾も許されている（〈勉齋公府志義行傳〉宗譜卷十九）。春山家塾の所有する学田は二百畝余りに上り、二人の先生がそれぞれ経・蒙つまり、経学と啓蒙の授業を担当する。

水竹庵義塾はもともと宗族の家廟で、代々尼を招請して住まわせた。しかし、二百年あまりが経った清の乾隆癸卯年に、住職の尼さんが持ち逃げをしたことによって、急遽、族塾に変更し、一人の先生が招かれ、宗族の子弟の啓蒙教育を担当していた。所有する学田はおよそ七畝あたりである。

養正齋義塾は村の北西部にあり、社廟の左側に位置する。村の東部にある春山家塾から遠く離れた村の北部や西部に住んでいる宗族の子弟の教育のために、春山家塾を創設した孫毓敏の孫の孫選が設立したもので、南に面して正廳三間、東邊遊廊、西邊廂房がつながり、北に面して平房が五間あり、春山家塾と同様に経・蒙の二人の先生が招かれていた。所有する学田は百畝に上る。規模は春山家塾に及ばないが、制度が春山家塾に準じている。

一つの宗族において、二つ或いは二つ以上の族塾を設立していることから、陽川孫氏宗族の子弟教育に於ける熱心さが窺える。甬上屠氏宗族の宗譜にも、一族の義莊内に一つ、義莊外の江北に二つの義塾を設立したことが記録してある⁶⁾。一つの族塾の就学人数は、宗族によって違う。前出の甬上屠氏の場合は十六人を上限にしている。三館とも十六人の上限を超えた場合は、四つ目の義塾を設立することになる。金淵高氏の場合は、就学人数こそ決めていないが、生徒が十名増えるごとに、先生を一名増員することを「新增宗学課規」に規定している⁷⁾。以上の例を見ると、一部の宗族は、教育の質を保つ為、就学人数の制限を設けている。その人数を超えた場合は、塾の増設や先生の増員などの措置をとることを明確にしてい

る。陽川孫氏の場合、族塾の就学人数についての詳しい規定は宗譜を見渡した限り見当たらないが、入塾の子弟の人数オーバーよりも、宗人の住む場所の分散化により一部の子弟が教育を受けることを断念せざるを得ないことに悩み、その結果、離れた場所でもう一箇所の族塾を設けることで問題の解決を図った。族塾を設立するのみならず、宗族の拡大や宗人の住む場所の分散化などによって生じた新しい状況に塾師の増員や塾の増設など適応した措置を取る、陽川孫氏のような教育重視の宗族は、宗族の子弟の皆に教育を受ける機会が巡るよう、宗族の教育事業を確実に推し進めていた。

尼の持ち逃げ事件によって急遽尼寺から族塾に変更した水竹庵義塾は学田の数も少なく、規模が小さい為、先生を一人だけ招請し、啓蒙教育を行っていた。一方、春山家塾と養正斎義塾は、ともに百畝以上の学田を所有し、かなりの規模を持ち、蒙・経の二人の先生を招き、啓蒙教育と経学教育の両方を展開していた。義学（族塾を含めて）の教育は、主に学童を対象に展開した蒙学を中心とする基礎教育であるとの見方が一般的だが、陽川孫氏のように、学童の啓蒙教育だけにとどまらず、経学の教育に力を入れる宗族も少なくない。宗族における経学教育を重視する傾向について、のちほど詳しく取り上げたい。

二 族塾と学田

明代の宋濂が書いた「龍淵義塾記」にこのようなことが記録されている：「章君之先世嘗以為病，謀創桂山、仙岩兩書院，以無恒産，未幾而皆廢。章君深憂之，與諸子計曰，無田は無塾也，奚可哉。遂樽節凡費，而用其餘斥田至一百五十畝。（章君の祖先が嘗てそれを憂慮し、桂山・仙岩の両書院を創ろうと謀ったが、恒産がない為、それほど経たないうちに、廢校になってしまった。章君は、息子達と相談し、言った、田がなければ、塾もない、そんなことはできようか。そして日常の出費を節約し、その節約した分で田を百五十畝買った。）」⁸⁾「無田は無塾（田がなければ、塾もない）」、一つの塾を長く存続させるには、定期的に安定した資金を提供し続けなければならない。それを可能にするのは、「恒産」つまり「田」などを所有

することにほかならない。それについて、陽川孫氏にも、はっきりとした認識がある：「設家塾以教育族中子弟，非為一時計，為子孫計也，規條雖具，而無經費以濟之，則無米之炊，足窮巧婦，亦何以善其後哉，此田産之所以必不可已也。（家塾を設けて宗族の子弟を教育することは、一時の為の計らいではなく、子孫の為の計らいである。家塾に関する規定や条例が揃ったとしても、経費の支援がなければ、米なしではご飯は炊けない、いくら器用な嫁でも困りだけである。その後はどのようにすれば良いのだろうか、此れこそ田地が無ければならない理由である）」⁹⁾ 故に、十三世の孫毓敏が春山家塾を創設した際、二百畝以上の田地を学田として寄付し、宗族の賢能な者を選んで、出納を司らせた。後に、その孫の孫選も新しい学塾を開設する際、百畝以上の田地を寄付した。

族塾には、一族の成員全員が力を合わせて資金を出しあって創ったものもあるが、宗族のある経済力を持っている有識者の寄付によって創設された例が最も多い。例えば、上虞県志の学校志に羅氏義塾、経氏義塾、謝氏義塾、王氏義塾、楊氏義塾、金氏義塾、丁氏義塾など、族塾に関する資料が残されている、それを見ると、上虞のほとんどの族塾は、その宗族のある有識者の寄付によって創設されたことがわかる。北宋の名相の范仲淹が族人救済の為、千畝以上の土地を寄付し、范氏義荘を創った。後に、宗族の貧しい子弟の教育の為に、范氏の義塾も設立された。范仲淹の義挙は後世に大きな影響を与え、范仲淹を模範として、私財を寄付して族人を救済する義挙は数えきれないほど地方誌や族譜などに記録されている。学田を寄付することも族人救済の義挙の一つである。

孫毓敏の孫の孫選が春山家塾を管理していた時、既に「其経費或至不敷（その経費は時には不足することもある）」¹⁰⁾ のような事態になっていた。学田から得た収入はどこに使われていたのだろうか。

春山家塾の学田の使い道について、宗譜の第二十八巻の「家塾録」に「田産」という項目があり、その記載によると：

今稽戸冊所載，為修葺費者凡若干畝，為完課費者凡若干畝，為修脯資者凡若干畝，為贍族資者凡若干畝，舉族之賢能者，司其出納，設簿以資稽考，而義塚路亭試寓之用，亦於是取給焉。¹¹⁾

今戸冊の所載事項を調べたら、修繕費用としての田は凡そ若干畝で、授業に関する費用としての田は凡そ若干畝で、先生への報酬としての田は凡そ若干畝で、族人を濟う資金としての田は凡そ若干畝ある。宗族の賢能な者を選んで、出納を司らせる、調べる用の帳簿を作る。義塚・路亭・試寓の費用も、ここから出ている。

二百畝の学田を建物の修繕費用、授業の費用、先生への報酬、宗族の貧しい人の救済、義塚・路亭・試寓の費用を賄うなどと、使い道を具体的に指定していた。

また、上述した「田産」の項目に「簿録附」という資料が附されており、その資料には春山家塾の収支の内訳が詳しく記録されている。それによると、春山家塾の収入として、学田の貸し出しによって得た収入の他に、族人の孫士敏などが寄付した守中庵と史家潭等地の合わせて二十八点九畝の蕩（水辺の低地）を貸し出して得た収入と、聚宝倉というところにある四部屋の家賃収入も含まれている。一方、その支出は具体的には、八種目ある：「日修脯、日完課、日祭祀、日月米、日捨材、日路亭燈茶、日庖例、日雑用。」¹²⁾ 修脯とは、先生への礼金や報酬；完課とは、授業に関わる一切の出費；祭祀とは、塾の開館閉館と文曲星・武曲星を祀る会などの行事に神や祖先を祀る時の出費；月米は貧しい族人に支給する生活保護金；捨材とは、なくなった貧しい族人の埋葬の費用；路亭燈茶とは、旅人の為のあずまやの建設維持費、街路灯や無料で提供するお茶にかかる費用；庖例とは、先生や生徒の食費と料理人を雇う費用である。

春山家塾の場合は、貧困層の族人を助ける「月米」や「捨材」の費用、「路亭燈茶」などの公益の為の出費も学田から捻出していた。それは、これらの出費は人を助けるところにおいては、学田と相通ずると考えられたからだろう。

先生の報酬はもちろん、塾生の茶飯費、授業に関わる出費の全てが、孫氏族塾の所有する「恒産」から出ている。ここで特に注目したいのは、「試寓」という項目の出費である。孫毓敏と孫連玉は春山家塾を設けた後、また、宗族の子弟が郡城で試験を受ける際、泊まる場所がないことに気づ

き、学田から得た収入の一部で郡城の宝珠橋の北岸に「春山試寓」を建て、受験生の泊まる場所とした。「試寓」の建設は子弟の科举受験の支援措置であると同時に、孫氏宗族から科举の人材を定期的に輩出できるようになったことの証しでもある。

族人救済の目的で、有識者の善意による寄付から始まった族塾、その経営が軌道に乗り、上手く行くためには、学田などの恒産の寄与は大きい。一方、陽川孫氏のような宗族は、相当な規模の学田が支えているゆえ、子弟の教育負担を最小限に減らし、経学・蒙学による質の高い授業を受けさせることができたのであろう。

三 族塾と「齊家」思想

莫大な財産を寄付して、族塾の設立に乗り出した十三世の孫毓敏が自撰した「宗学碑記」でこう語る：

吾宗居斯三百餘年，間有文人，如晨星落落，循誦習傳，其容已乎。予自惟短汲，輒與兒子連玉搢摭其資，創為学舎一區，延經蒙兩師課讀，仿古人八歲入小学，十五入大学，以合於小子有造，成人有德之意。¹³⁾

私たちの一族はここに居住して三百餘年になる。先人に学問を修める文人は時には現れるが、明け方の空に残った星のように寥々としている。誦習することは、やめていいのか。私は自身の能力が薄く、教えることはできないと思い、そこで息子の連玉と資金をかき集め、学校を一つ創った。二人の先生を招請して、経学・蒙学の授業をそれぞれ担当させた。「小子造す有り、成人徳あり」¹⁴⁾の意に合うよう、古人の八歳で小学にはいり、十五歳で大学に入る制度を手本にした。

孫毓敏が族塾を設立することを決意させた直接の動機は、宗族の人材層の薄いことを憂慮したからである。陽川に移住して来て、三百餘年の歳月が過ぎたが、しかし、今まで現れた人材の数は晨星の如く少ない。それは宗族の教育環境の不備によるものだと痛感した孫毓敏は、族塾を設立し、

人材不足の解消を目指した。春山家塾は、学童向けの基礎教育だけでなく、経学の教育にも力を入れ、「小子有造，成人有徳」という教育目標を掲げた。「小子有造，成人有徳」とは、『詩・大雅・思齊』から取った、周文王の人材育成の功績を讃える言葉で、(教育を施すことによって、)少年は善行を修め、成人は徳を備えるという儒家思想における理想的な教育目標である。それが実現できれば、「則入孝出弟，而式酬琴瑟，相将典墳，秀者得與於斯文，其樸者亦得近乎鄒魯。(それで子弟達は家にいれば親孝行をし、外に行けば、兄長を尊敬する。お互いに三墳五典を習い、琴瑟で唱和する。優れた者は文人になり、その樸拙な者も孔孟の学に近づくことができる。)」¹⁵⁾

一族の者は族塾の教育を受け、孔子の唱えた「入則孝、出則弟（家に入れば親に孝行をし、家を出れば兄長を尊敬する）」¹⁶⁾の道徳的規範を守り、儒家の經典を愛読するようになる。その中から文人になり、宗族に栄光を齎す人材の輩出はもちろん期待されるが、子弟たちの皆が儒家の孝悌等の思想を身に付けることが重要視されている。孫毓敏は族塾を通して、儒家の思想を経済能力の持っていない貧しい子弟・本来科挙に向いていないと思われる「樸者」の子弟にまで浸透させようと、族人の儒学教育を積極的に推進した。それは、族人の素質を高めようとする目的もあれば、儒家の唱える「孝」「悌」などの倫理道徳規範で宗族の秩序と調和を保つ狙いもあるのだろう。

族塾の設立によって、儒学思想が宗族の隅々まで浸透するようになれば、自ずと、人材の輩出も期待できる、と、孫毓敏はそう考えている。では、陽川孫氏の育て上げたい人材像はどんなものであろうか。

宗譜の「家塾録」では、族塾の利用者に、こう語っている：

肄業於斯者、當思通經致用，上以文章華國，下以忠孝傳家、方為無負先人、無負所学。區區博科第、腰金紫、耀妻孥云爾哉。¹⁷⁾

ここで授業を受けた者は、経に精通して、実際に役立てることを思うべし。上にいく者は文章を以って國をよくする、下にいる者は「忠」と「孝」を代々伝えるべし、それで先祖にやましいことなく、習ったものに

もやましいことはないと言えよう。たかだか科挙で功名を得て、高級官僚になり、妻子に栄華富貴を齎すことだけなのだろうか。

宗族の求める人材は単に科挙で成功し、宗族に富貴栄華をもたらす科挙に長けた人材ではなく、儒家の經典に精通した上、実際に応用することのできる人材である。それは宗族をまとめることについて言えば、忠や孝等の儒家教義を代々伝えること；それは治国の段階で言えば、自らの「文章」で國を繁栄に導くことである。

族塾の教育によって、一族の者は身を脩める。一族の者が身を脩めることによって、家（宗族）を整えることができる。家が整えば、治国の才能を持つ人材も続々と現れる。総じて言えば、孫氏宗族の教育観は、終始「齊家（家を整えること）」を儒家の教えである「修身・齊家・治国・平天下」の一環と強く意識している。

四 宗族における族塾の役割

前述したように、族塾は宗族の教育機関として、族人を儒家の思想で教育し身を修めさせ、また、忠・孝・悌などの儒家教義で宗族を整える過程では大きな役割を担っていることがわかる。宗族における族塾の役割は、それだけにとどまらなかった。族塾は以下のような役割をも担っていることが明らかになった。

先ず、古代中國には「士農工商」という四民分類法があり、その首位に位置する「士」とは、知識人のことである。宗族の子弟の資質はもちろん十人十色であり、狭き学問の道に向いていない生徒もいると考えられる。前文に引用した孫毓敏の「宗学碑記」の「秀者得與於斯文、其樸者亦得近乎鄒魯」の言葉からもわかるように、族塾の教育対象には所謂「樸者」も含まれているが、しかし、「與於斯文」、つまり、知識人になれるのは、一部の「秀者」にすぎない。故に、子弟の将来の生計のために、族塾の段階で生徒の資質を評価し、一部の学力の高い生徒に知識人になる道を勧め、継続的に経済的バックアップを施す一方、学問に向いていないと判断された生徒は、族塾での教育が終わった後、農業や工・商などほかの技能を身

につけるよう引導する。それは、宗族の教育資源の有効利用との考慮もあるが、子弟の将来の経済的自立を考慮した上の措置であろう。丹徒倪氏の例を見てみよう。丹徒倪氏宗族の族譜に、二十一項目もある家塾規條が記録されている。その十九條目によると、塾生は満十六歳になると、塾を出て自ら生計を立てなければならない。しかし、資質が優れていて、将来有望な者だけを、塾に留める、或いは他校に入学することが許される。甬上屠氏の宗譜にも、以下のような記録がある：「貧族子弟到塾讀書，以七歲起，如年已十六歲，實在於書不相浹洽，須實告其父兄，預為別尋生路，切勿容隱，轉致誤彼終身（宗族の貧しい子弟が塾に来て学習するのは、七歳からである。もし十六歳にもなって、実に書との相性が悪ければ、必ずその父兄に隠さず伝える、それで予め他の活路を用意することができる。決して隠してはならない、それは却って彼の一生を台なしにするのだ。）」¹⁸⁾ 言わば、族塾は、宗族の子弟を「士」と「農・工・商」と、将来どの道に進ませるのか、その適性を甄別する機関とも言えよう。

次に、族塾は詩文会などの文学活動を画策・主催することによって、宗族の文学活動を促進する。例えば、春山家塾の創始者の孫毓敏は、春山家塾のなかにある建物や景色について自ら『春山十九詠』を作り、又、『春山書塾徵詩啓』を出し、宗族外に向けて、広く詩を求めた。それに応じて、名士邵二雲をはじめ、およそ 28 人から 36 首の詩を寄せられ、山陰詩壇の一大盛事となった。後、息子の孫連玉も『後詠』十九首を書き、詩友と唱和した。族塾の主催する詩文会は、宗族内の文学活動を促進し、活発化させる一方、地元に於ける一族の文化影響力を高める効果もあった。

次に、族塾は宗族の出版や蔵書の機構としての一面もある。明清時代、官刻と坊刻の他に、家刻つまり個人で書物を刊行することも盛んに行われていた。家刻本のなかに、族塾が資金を出して刻工を呼び、刊行した書物も少なくない。例えば、元代に設立された蘇州の范氏宗族の歳寒堂家塾は、開設当時から六百年近くの間、祖先の范仲淹等の詩文集を十数回出版した；会稽董氏宗族の取斯家塾は明から清までの七人の族人の二十種の作品を整理し、『董氏叢書』として刊行した；竹橋黃氏家塾は黃宗義等族人の作品を整理・出版した。陽川孫氏宗族の宗譜にも、宗譜の再編の際、春

山家塾で宗譜作成の機構を作り、宗譜の編纂から刊行までの全ての過程を取り仕切っていたとの記録が残っている（＜陽川孫氏宗譜序＞）。族塾の編纂・出版事業は、宗族の子弟の教育だけでなく、宗族の文化を伝播するにも大いに役に立っている。それを支えているのは、族塾の人材資源はもちろん、学田による資金提供も不可欠であろう。

族塾の塾生の学習に備えて、蔵書の一部を族塾に置く宗族も少なくない。丹徒倪氏宗族の場合は、族塾の蔵書は経・史・子・集の四部に分けて、一万二千巻にも上る、立派な蔵書機構と言えよう。経学教育重視の族塾ではあるが、文学作品の多い集部の作品も千三百巻以上所蔵している。丹徒倪氏の族塾の蔵書は、塾生だけでなく、塾生以外の宗族の子弟、乃至郷里の学徒に開放している。宗族の文人の書いた作品を族塾で保管する宗族もある。例えば、清代の歴史家の錢儀吉が編纂した嘉興錢氏宗族の一族の詩集『錢氏詩匯』のなかに、八世の詩人錢千秋の詩について、小序が施されていた：「（余）稍長，愛誦先生詩，每有所見輒以録藏，暇日類次成帙，實諸家塾，庶幾思先生之全稿不可見，見此一編如見全稿焉。（余は少々年を取ってから、先生の詩を愛誦するようになった。目にするとすぐに抄録して収蔵し、暇のある日に分類して帙にして、家塾に置く。先生の全編を見ることはできないが、この一編を見れば、先生の全編を見ているのと同じ、と思うばかりだ。）」¹⁹⁾ 大切にしている先人の作品を「實諸家塾」と表していることから、家塾は蔵書の場所としての機能を備えていることが示されている。又、塾に先祖の作品を置くのは、族塾を通して、家学を後世に継がせようとの狙いもあるだろう。

終わりに

族内の貧困者への救済の一環として、有識者の寄付などによって設けた族塾は学田などの恒産のバックアップで、宗族内の教育普及を推し進め、宗族の人材育成に関与した。一方、宗族内の教育普及は儒家思想の宗族内の普及の過程でもあり、蒙学・経学の授業を通して、儒家の忠・孝・悌などの思想が宗族の隅々にまで浸透し、宗族自身の秩序と調和を保ち、家を整えるのにも大きく寄与した。又、族塾は教育機関としてだけでなく、文

化機関としても機能し、宗族の文化活動の活性化・宗族の地元における影響力の拡大にも大いに貢献している。

族塾の歴史は、宋代まで遡ることができる。明清時代、特に庶民が宗祠を立てることが許されるようになった清朝になると、族塾の設立は盛んに行われるようになり、一部の宗族は宗祠・宗譜・族産の三点セットを揃えた上で、族塾の上述での役割に目をつけ、宗族の文化的結束力と繁栄を求め、族塾の設立と経営に力を入れた。族塾の存在は、文化宗族現象、つまり、一つの宗族から人材が集中して現われる現象の一つ重要な成因であろうと、筆者はそう思う。

【注】

- 1) 伊藤漱平訳『紅樓夢（上）』第七回（中國古典文学大系 44、1994年3月初版第十四刷、平凡社）
- 2) 伊藤漱平訳『紅樓夢（上）』第八回（中國古典文学大系 44、1994年3月初版第十四刷、平凡社）
- 3) 多賀秋五郎『中國宗譜の研究』第五章第一節（1981年12月、日本学術振興会）
- 4) 大木康「明清時代の科挙と文学－八股文をめぐって」（『中国－社会と文化』第7号 東大中国学会、83-96、1992年）
- 5) 胡学亮「清代中國に於ける族塾の普及とその要因」（『大学生涯教育学・図書館情報学研究』8、29-45、2009年3月）
- 6) 『甬上屠氏宗譜』卷三十四（民国8年即勤堂木活字本）
- 7) 『金淵高氏家乘』卷首（民国3年德遠堂木活字本）
- 8) 宋濂「龍淵義塾記」（『浙江通志』卷二百六十一、浙江書局清光緒25年刻本）
- 9) 『陽川孫氏宗譜』卷二十八（道光十年木活字本、敦彝堂藏版）
- 10) 『陽川孫氏宗譜』卷二十八（道光十年木活字本、敦彝堂藏版）
- 11) 『陽川孫氏宗譜』卷二十八（道光十年木活字本、敦彝堂藏版）
- 12) 『陽川孫氏宗譜』卷二十八（道光十年木活字本、敦彝堂藏版）
- 13) 『陽川孫氏宗譜』卷二十八（道光十年木活字本、敦彝堂藏版）
- 14) 石川忠久訳『詩經』（新釈漢文大系 110、平成9年9月、明治書院）
- 15) 『陽川孫氏宗譜』卷二十八（道光十年木活字本、敦彝堂藏版）
- 16) 『論語』「学而」に見られる言葉：子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有余力、則以学文。

- 17) 『陽川孫氏宗譜』 卷二十八 (道光十年木活字本、敦彝堂藏版)
- 18) 『甬上屠氏宗譜』 卷三十四 (民国8年即勤堂木活字本)
- 19) 『錢氏詩匯』 (清稿本)